

シシパシマ中央峰(8008m)

登山記録

2004年9月1日～10月7日



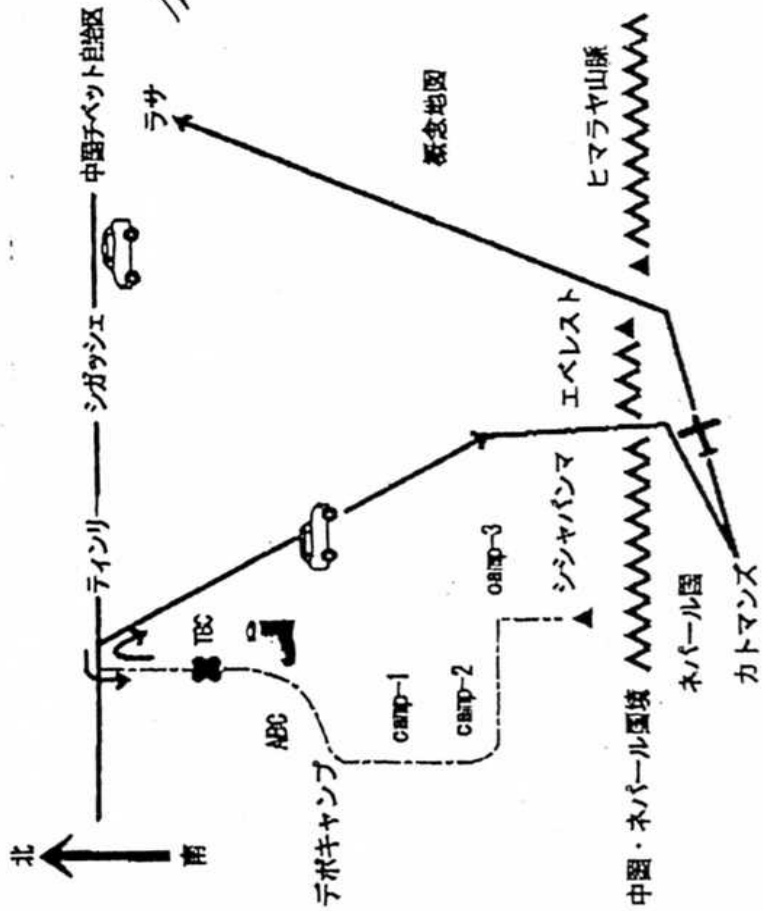
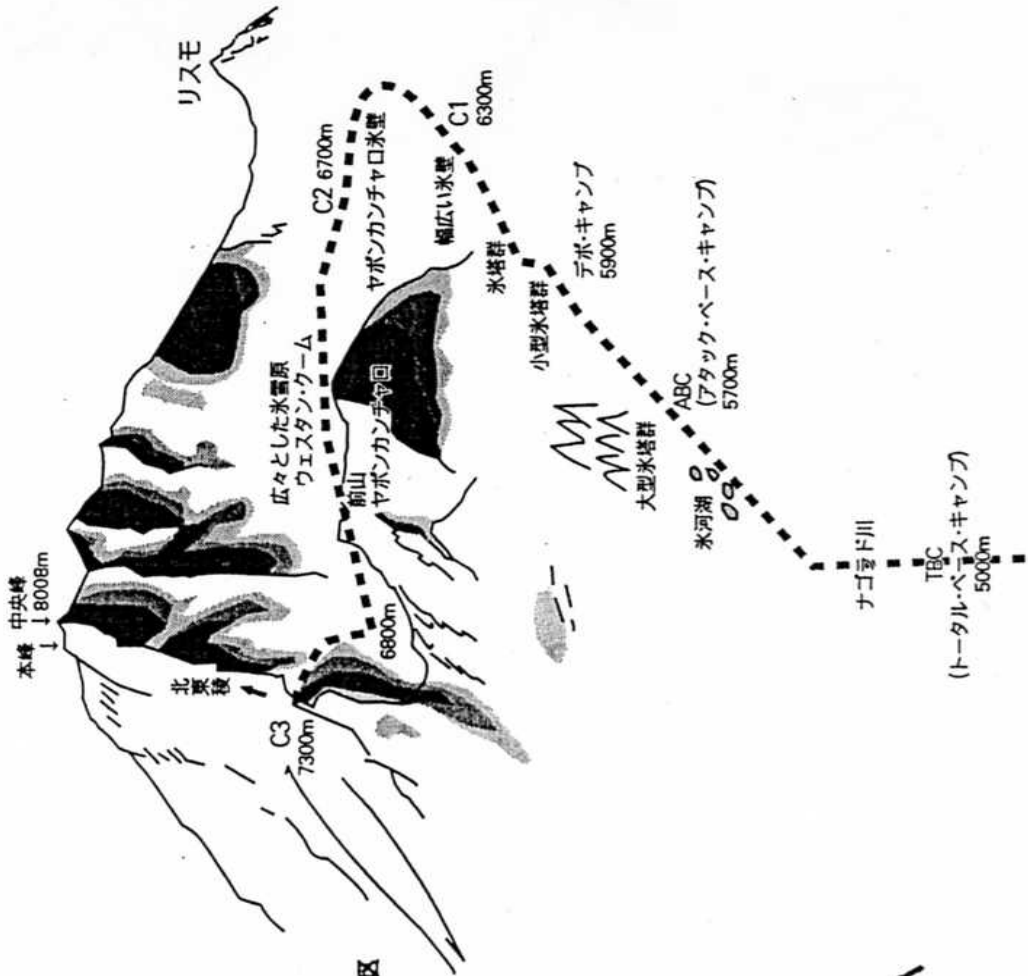
東三河山ぽ会会員

(株)マサキクリーニング 政木通弘

シシヤパンマ中央峰 (8008m) 登頂記録

概略図

北側から南方向を見る



シシャパンマ中央峰（8008m）

登頂記録

マサキクリーニング社長 政木通弘

夢のまた夢の8000m峰に2004年9月27日登頂出来、未だに夢心地であります。

そして日本ヒマラヤ協会のヒマラヤNo. 399号・『八千メートル峰高齢実登頂者リスト』に著名な登山家と並びベスト8でランクされ全く驚きやら感激です。

私は生まれながらに自家中毒がひどく春秋7～10日位はゲロして、にがく黄色い胃液まで嘔いていました。成長するにつれ期間が短く、症状も軽くなりましたが常に胃の入口に塊がある感じで体を後ろにそらす事がはばかれました。

健康になりたくて早稲田大学に入学した18歳から登山を始めました。その頃、マッターホルンの写真を見て更にのめり込むようになりました。

（株）リコーのサラリーマン生活も暇を惜しんで山に登る日々を過しましたが、父が癌になり豊橋に帰ってからは仕事潰けになりました。

50歳を過ぎ昔の山に登るうち段々と若い頃身に付けたものを思い出し、自信も戻ってきました。

登山のサークル《東三河山ぼ会》に入会し仲間と過すうち若い頃のレベルまでになりました。

初恋の山マッターホルンに58歳で登頂し思いをとげ『40年来の夢 孤峰の頂 己の足音のみ』と全紙に現代詩文で書き雲龍会の社中展に出品できました。ヨーロッパアルプスには2度、1996年と1998年に家内と一緒に出掛け7峰登頂しました。（家内も3峰登頂）

2002年にはシルバートートル会（田部井淳子・渡辺玉枝・石川富康等がメンバー）で未踏のチベット最大の氷河・来古氷河（ライグ）最奥の探査（5600m）を成し遂げました。

2004年3月エベレスト・ピュウポイントのひとつカラパタル（5545m）へ仲間と家内とで登頂した時シシャパンマ（8008m）の計画を知りました。

6000m、7000mの経験がないので躊躇がありました。山に登る者として8000m峰登頂は夢のまた夢のことです。別世界のことと思いつつも胸の何処かで求めていたことです。

家内と息子が応援してくれ実現しました。感謝・感謝です。

東京都飯田橋のアドベンチャーガイズ（以下AG社）の公募隊に参加しました。9月1日～10日7日の37日間です。

隊長の大蔵喜福は冬期エベレスト北壁最高高度保持

者で二十数年間破られずに保持しており、登頂率の大変高い方でひげの大蔵のニックネームで知られています。

参加申込書や規定の健康診断書、パスポートを郵送することから始まり、高所用の装備を買い足しました。高所用羽毛ヤッケ、羽毛ズボン下、羽毛オーバー手袋、高所用プラブーツ、アイゼン等を東京・新大久保の石井スポーツで購入しました。

8月10日までに別送品として、入山したあとABC（アタックベースキャンプ 5700m）まで梱包を開けられない高所用登攀装備を事前に箱詰めしてAG社に送りました。

春のクリーニングの繁忙期が過ぎると9月1日の出発までに時間がありません。

ザイルパートナーの内橋和義と3回富士山山頂で宿泊し高所順応をして出発前の仕上げにしました。

シシャパンマ（8008m）はチベット語で“ 厳しい天候の山、生き物も植物も育たない地 ” の意味です。この山はインド、ネパール側ではゴザインタン（聖者の居所）と呼ばれていたが、現在では国際的にシシャパンマと呼ばれている。

山頂、登攀ルートはチベット自治区ニューラム県にありチョモランマ西北120kmに位置する。地球上第14番目の高峰である。

ヒマラヤン・ジャイアンツ14座の中で登頂されたのは一番遅く、1964年5月、中国隊によって初登頂された。その後、足場が余りにも悪いため2003年までに201人しか登頂されてない。（2004年度の春秋の登頂者は未だ発表されてない）

主峰は8027mあるが中央峰からのトラバースで雪崩事故が非常に多いため、現在では中央峰登頂をもって国際的に登頂と見なされている。



アプローチ

【9月1日】成田空港 バンコク泊

応募者6名と隊長・大蔵喜福、副隊長・近藤明が全メンバーである。大蔵は昨日すでに出発しており、7名が成田空港ロビーで初顔合わせをする。

隊員・6名の平均年齢は61歳の年寄パーティーだが、内4名がリタイア組みだ。リタイア組のうち2名はチョー・オユ（8201m）のサミッターであとの2名が6000m～7000mの経験者、それぞれの山暦もさることながら登山では現役バリバリの猛者ばかりのようだ。

一番若い45歳公務員はヨーロッパ・アルプスの4000m台だけの経験しかないが現役真っ盛りのタフガイだ。

家族に見送られ成田を出発する。

【9月2日】バンコク カトマンズ泊

カトマンズでは昨日、囚われていたネパール人12名がイラクで殺害された。報復にモスクやイスラム系企業のビル、カタール空港ビル等を焼く暴動が起きる。街角に銃を持った兵隊が数人ずつ立っているだけで街並みに人影が無い。終日戒厳令が出され、『ツーリスト・オンリー』の張り紙のワゴン車だけが通行可能とみえ、空港からシンギ・ホテルに向かう。

【9月3日】カトマンズ泊

戒厳令が出ているのでシンギ・ホテルの裏のレーガル・トラベルの庭まで走りこみ、サーダー（シェルパ頭）やシェルパ、コックと顔合わせをする。テント、装備の点検、梱包、出発準備を見守る。

朝、夕の通勤時間は戒厳令が解かれるのはのんびりムードのネパールらしい。

【9月4日】カトマンズ ラサ泊

シェルパ達は数日後、カトマンズから山道を辿りコダリを通過し、国境の街ザンムーからチベット入りして、二日間でTBC（5000m）に到着するルートをとる。

私たち日本隊はカトマンズから空路でチベット最大の街・ラサに飛ぶ。

トヨタのランドクルーザーで高所順応をしながら峠を幾つも越え、広大なチベット高原を走り西方へ1000km余り先のTBCに向かいシェルパ達と合流するルートをとる。

カトマンズを飛び立つとすぐ左にエベレスト、右にカンチェンジュンガ、ジャヌーが見られ雲間からの姿は圧巻である。

ラサ空港は制服に身を固めた職員がやたらと目に入り硬い雰囲気だ。空港、道路、街並み全てがカトマ

ンズより豊かである。

1時間半ほどでヒマラヤン・ホテルに着く。2年前に宿泊しており、チベット登山協会が経営するレストランに隣接している。

余り熱くならない薄茶色のお湯のバスにつかり心身をほぐす。

【9月5日】ラサ泊

ラサはチベット最大の都会で中心地にはビルが林立し、新しい物と古い物とが混合した活気に満ちた都市です。標高が3650mあり街の散策が高所順応になっている。

朝、1409年建立の甘丹寺（ガンデンジ）4300mに出掛け観光後、更に200m程高い裏山で高所順応をする。

午後、五体投地の大昭寺、チベット仏教の本山ポタラ宮殿を観光する。

高所撮影用に持ってきた写真機・コンタックスのフィルム枚数の目盛りが壊れているのか写真機自体が不調なのか調べるべく、フィルム1本を撮影しDPEに出す。日本同様数時間後に出上がるので夕食後引取りに行く。しっかり写っており安心する。

【9月6日】ラサ シガツェ（3860m）泊

トヨタのランドクルーザー2台に分乗し、ガタガタ道を360km走りチベット第二の都市シガツェに向かう。

出発後すぐ、地熱発電所があるヤンパーチンの村が現れる。土壁の家々を通過してしばらくすると広大に広がるチベット高原からニャンチェンタンラ山脈のマーチャンチョモ（7001m）を見ることが出来撮影する。

途中 シャクラ峠（5285m）、ドングラ峠（4845m）を越える。ダートカーでヤルツァンポー河の渡し跡（3810m）を渡る。大蔵が春、チョモランマ遠征で通過した時までは渡し船だったが数ヶ月で立派な橋に架け変わっている。河に沿って西進しチベット第二の街・シガツェに着く。HOTEL MANAS AROVAR（神湖酒店）泊



【9月7日】シガツェ泊

手違いがあったのか電信會館(リケゼ・テレコム・ホテル)へ移動する。向かい側のカラオケ・バーの嬌声と車の騒音で全員寝不足。タシルンボ寺参拝するが予定の裏山登らず。夕食後、隊長・大蔵の衛星携帯電話から家内に電話する。1分20秒:6ドル。

【9月8日】シガツェ ティンリ(4415m)泊

今日もガタガタ道を土煙をあげて走りツォーラ峠(4475m)を越す、加措拉山(Gyatsola Pass)(5220m)での『ここよりチョモランマ国立公園』の横断幕が目引く。広い高原のド真ん中の検査所(4300m)の役人が書類に目を通し遮断機を上げる。

ティンリ手前で『左 チョモランマBC』の道標を見る。

ティンリはチョモランマ、チョー・オユー、シシャバンマへの最後の村になる。

宿舎のエベレスト・ビューホテルとは名ばかり。土壁の長屋造りで、小さな裸電球がぶら下がっているだけの室内は暗いが、木のベットの脇に転がっていた蠟燭に救われる。

外のトイレは板を二本渡しただけで、隣り合わせの便座には間仕切りがないチベット式を見て、いよいよ登山間近かを感じる。

シェルパ達、サーダーと合流する。

チョー・オユーにチャレンジする仙台の高齢者7人のパーティと同宿。他に外国隊2隊が居る。

食堂を6年生位の女の子が大声で仕切っている。将来の肝っ玉母さん間違いなしだ。食事は野菜が多く大変旨くおかわりを繰り返す。本日の走行距離310km



【9月9日】ティンリ泊

朝食後、少し離れた4710mの山頂に高所順応に出掛ける。

宿を出るとすぐ、チベット高原の南に左からチョモランマ、ギャチェンカン、ゴジュンパカン、チョー・オ

ユー、チョーアオイ、ナンバラ、チョーラブサンと並び、私達を素晴らしいパノラマが出迎えてくれる。朝日に輝いているヒマラヤの7000m~8000mの巨峰群を眺め驚沢な山行を楽しむ。山頂でやはり高所順応に来たセルビア隊と一緒に記念撮影する。(隊長ミーチョ・53歳)

帰途、道端に高さ1m程の石に赤字で5192kmとある。首都・北京からの距離だ。広大な国を統一する一つの手だてなのか。

昼食後、車で20分程西に最近開発されたタムダ温泉に出掛ける。室内(40元)室外(12元)。鉄分を含んだ自噴の温泉は湯量豊富で、私達だけでゆっくり寛ぐことが出来た。

今日を最後に入浴、ベッドでの就寝が24日間お預けとなる。



【9月10日】ティンリ TBC(5000m)

早朝出発し、広大なチベット高原をひたすら走る。我々の車と並行して野生の小鹿や野生の口バが全力で走る姿が印象的だ。

ガタガタ道の右に大きな湖を見る辺りから南に進むと、雪をまとった山々が見られるようになりTBC(5000m)に到着する。車両は此処まで、これからは歩きと荷物はヤクで運ぶことになる。

TBCからの光景は、東の高台の下がテント場、南に氷河が溶けて流れるナゴラド川越しに広大な高原が広がり、その先にモラメンチン、シシャバンマ、リスム、カンテンポチェが横たわる。西に異様な姿のランタンリが低い山々を従えて構えている。北は我々が入山して来たチベット高原でその先にドデカイ湖が青く光っている。

TBCのテント場はナゴラド川沿いに、チベット登山協会の大テントが建ち、4人の中国役人が常駐し入山許可、装備等の査察をしている。並ぶように売店のテントと先着の東欧隊の数張のテントが張られている。東の山裾には白いコンクリート造りのトイレとゴミ捨て場がある。

我々日本隊のテントは1人1張の割りで8張設営される。食堂用、炊事用、シェルパのテントと並び大所

帯だ

時計を北京時間から2時間15分遅らせたネパール時間に変更する。

シシャパンマ山頂も登攀ルートもチベットなのだが、中国全土が統一時間なので、離れ過ぎたこの地では実情に合わないのだ。(例：日本12時：中国・チベット13時：ネパール15時15分)

午後、5150mの裏山へ高所順応に出掛け、セルビア隊のミーチョ達と再会し談笑する。モンスーンが明けてないので晴れたり、曇ったり、小雪が降ったり目まぐるしく天候が変わる。



夕方一時、高原越しの全山が姿を見せる。登攀ルートのシシャパンマ中央峰へ突き上げる北東稜は雪と岩の急傾斜のナイフリッジでかなりの鋭峰である。取り付くと手応えありそうだ。

大きなテントの売店でコーラ5元(65円)を買った時、夜長のテント内で使用するサブのヘッドライトを売店の親父に注文すると2時間程で持って来る。何処で調達したのだろうか？1万円札を渡し、釣銭200元受け取る。7600円程の買い物で大変高価だが命と引き換えと思えば致し方ないと自分に言い聞かせ就寝。

【9月11日】TBC泊 夜半から雪

朝、銀世界だが昼ころまでには雪も消える。

午前中、デポキャンプへのルート途中まで2時間半ほどブラブラ歩きして大岩で引き返す。帰りは行きと違う所を渡渉するようになり皆が難儀する。川へ石をなげ込み飛石作りをしたりしているが、私は面倒くさくなり靴のまま膝ほどの水深を渡る。氷河の溶けた水は冷たく頭の先までしびれる。その後、トイレトッパーを靴の中に2度入れ替えて乾かす。

今日から朝食、夕食後、高所順応に利く利尿促進のためのダイアモックス半錠を服用する。明日のデポキャンプへの出発は荷運搬のヤクの到着が遅れ1日延期となる。

ヒマラヤ登山隊の一日を紹介すると、イギリスの良

き時代の貴族達が自国の日常生活に近い形で登山をしたい望みから現在の形として残されたようだ。

贅沢に思えるが、幾世代にも及び4000mの高地に生まれ育ったシェルパのDNAと違い、海拔0m育ちの人達が登頂率を良くする方法として定着したのだろう。

テントは1人1張で厚いテントマット、上等なシュラフまで用意されている。

6時15分 隊長に同行している近藤が各テントを回り、パルス・オキシメーターを人差し指に挟み全員の血中酸素飽和度と脈拍数を記録してゆく。

6時30分 キッチン・ボーイがテントを回り『グッドモーニング。ティー・プリーズ。シュガー？』と紅茶を差し入れてくれる。

6時45分頃 洗顔用の暖かいお湯を洗面器にいれテント前に配っていく。

7時過ぎ 『ブレックファースト』と呼びに来る。

テントの入口には吊るした手洗がある。

立ちの高いテントが2張続きで建てられている。食料置き場と食堂になっており、テーブルと椅子で食事が出来る。日本食主体の献立が続き驚きだったが、更に疲労した時には気遣いして粥や麺が出され大変有難かった。

昼食 高所順応のウォーキングから帰ると暖かいものが出される。帰れない時は弁当の用意をしてくれる。

1例：黒と青のりが散りばめたおにぎり2個、銀紙包装で甘い卵焼き4切、きゅうり・人参・大根の一夜漬、小ソーセージが入っており。別の包みに皮をむいたリンゴ半分。

3時頃 ホット・ジュース

夕食 メニュー1例：『ネパール産ジャポニカ米のご飯、鯉節のだしの汁、ほうれん草のオシタシ、大根おろし、キュウリ酢のあえ物、醤油漬け粒のんにく、とんかつ5切にキャベツのみじん切りと花模様の人参が添えられる。缶詰パイナップル3切。』

暗くなってから食事だが、隊長・大蔵がラサでソーラーを購入してきたので蛍光灯の明りの下で美味しく食べられたし、時にはラサで購入のビデオの試写会もあり楽しい団らんが出来た。



ヒマラヤ登山では一次隊、二次隊と人選して小刻みにアタックする方法が取られてきたが、そうすると登れる人と登れない人とが出る。

大蔵氏は『縁あって組んだパーティは楽しく登り、全員と一緒に頂上に立つ』ことを持論にしており、『登らせる喜びが登山の最高の面白さだ』とも著している。大蔵氏とサーダー（シェルパ頭）、カトマンズのエイジェントとの付き合いは二十数年になり、彼の理想の登山形態を共同で構築してきたのだ。

この度のAG社の案内書には『参加者自身の技量だけでは登頂が難しい登山愛好家に、山岳ガイドが登頂に必要な技術、経験の足りない部分をサポートしながら登頂を目指す公募隊です。』と記されていた。

今回参加した高齢者の我々全員が、登頂率の高いひげの大蔵隊に参加出来たことに感謝しています。

『9月12日』TBC泊

昨日の新雪で山麓まで真っ白になっているシシャパンマやそれに連なる山々に抱かれるように、明日、目指すデポキャンプまで往復を試みるが、5410m地点でテントを見ないまま引き返す。不毛と思える高原を延々と歩く途中に、幻の花ブルーポピーを数個見付け撮影する。

8時間20分を要した。

明日の道のりは大変長くなりそうだ。



『9月13日』TBC 中間デポ(5450m)

出発し昨日の左岸にかすかに残された踏み跡を辿る。広い高原歩きからモレーン（氷河が運んだ石ころの巨大な堤防）の淵を登るようになり、6時間余り進むと予定のデポ地点に着く。

連日の行動で全員バテ気味。胃腸の調子よくなく食欲なし。

ヤクで運搬中の梱包を開けたくないの食堂用テントに8人雑魚寝する。

夕食後、シシャパンマとリスムの間の奥で連続して閃光を見る。モンスーン明けであってほしい。

【9月14日】中間デポ ABC(5700m)

昨夜は8人の雑魚寝だったので寒さも気にならず熟睡できた。

朝食：お粥 ドンブリ1杯
パンケーキ 1枚
玉子 1個

お陰で快便、モレーンを下り石ころだらけの川原でする。近藤が終わってズボンを上っている。20mほど先で南井が構える。山梨が何故か真ん中を通り抜け前の方で横向きに座る。

皆、チベット、ネパール流の仕切りのないトイレに慣れているので他の人が気にならなくなっている。

終わると石をかぶせ退散。

今日の予定は3時間ほどなのでピスタリ・ピスタリ（ゆっくり・ゆっくり）でモレーンを進む。

5545m地点で氷河末端の氷塔群を見る。ヤポカンチャロ氷河は数Km続き、大きい氷塔は50mほどの高さの三角錐になっており、横縞の年輪を数えると数百年にも及んでいる。

重なり合い林立している氷塔群は、下流域は高く上部にいくに従い低くなるが氷河の幅が1Kmにもなる。

モレーンの踏み跡を進み5700m地点の左岸の窪地にABCテン場を見る。

先着のヨーロッパ系登山隊6隊に我々日本隊と他1隊（トイレテント数で分かる）が加わる。ヤク36頭から荷物を下ろし設営する。ヤクー頭が60kg背負うので2160kgの荷上げをしたことになる。

テント2張をつなぎ合わせた食食用テントを中心に、西の山側に日本隊分8張、東側にシェルパのテント、離れて炊食用テントが設営される。

AG社持参の衛星アンテナが立てられるとABC最大の規模となる。

8月8日AG社に別送品として送った冬物の荷物を受け取り、早速、冬用フリース・ズボンとズボン下に着替える。

サーダーがテントマットの頭を西向きにするように全テントを見回っている。ブダの恵があるそうだ。北枕は娘の方向でダメと真剣になっている。意味不明。



【9月15日】ABC泊 休養日

我々の目覚めに合わすように、雷鳥を一回り太らせたヒマラヤン・ピーコックが10羽程テントのそばで群れているのを見掛ける。これから毎朝、プヨプヨと鳴き声をあげながらABC周辺のわずかに見られる枯れ草の地に飛来してきた。鳥は他にカラスや雀を見るが、シェルパ達は鳥を神聖視しているのでいじめたり、ぼったりすることはなく、捕獲などは絶対にしない。

午前中、食料品の整理をする。食堂テントの壁際にダンボール箱を重ね、ABC食事も、調理してもらう物、アタック持参用とに分ける。

午後、大蔵、斉藤がソーラーとパソコンの接続作業をしてアンテナを立てる。パソコン専用テントを設置して用意するが、残念ながら衛星から気象情報を収集する接続が出来ず大蔵、斉藤氏の努力が報われなかった。それに持参した衛星電話も機能しなかった事でダブル・パンチだ。

残された通信手段の無線は、朝夕、高所のシェルパとの交信をサーダーが時間通りおこなっている。

隣のイタリア隊にお願いして、家内に衛星電話する。1分55秒：6ドル。互いにバラ銭なく10ドル払う。

呼吸促進剤のダイヤモンド0.5錠を飲み続けており、小便の回数が増えるのでアメリカ製のナルゲン（広口の1Lビン）をテント内の小便用に使用して重宝する。リミット3回まで。

シュラフに入ると鼻づまりになり息苦しい。大蔵から鼻の穴に噴霧する薬もらうが、ハンカチに血がにじむようになる。寒さ厳しくフリース1枚着込み、手袋・マスクして就寝する。



【9月16日】ABC泊 頂上見られず
朝、アンダワを除いたシェルパ6人がデポキャンプまで荷上げに出掛ける。酸素ボンベ18本・スノーバー30本・フィックスロープ・16段のアブミ他。1人30kg程の重量か？

我々も高所順応に出掛け、3時間程歩いたデポキャンプ手前の5785m地点で引き返す。デポキャンプ

C1 C2へのルートを目視に確認する。全員疲労気味なのと距離が長過ぎることで、ABCとC1の間にデポキャンプを設置してくれることになる。大蔵とサーダーの気配りが大変有難い。

テントに戻り腹を手のひらで触ると異常に冷たい。私の弱みの一つ、娘に特注で作ってもらった金太郎の腹巻きをする。用心に胃薬2包み飲む。



【9月17日】ABC泊 終日、頂上見られず。
朝、シェルパ達はC1まで荷上げに出掛け、10時間かけ夕方帰ってきた。我々なら倍の時間掛けても不可能だろう。

酸素マスクと酸素ボンベ装着訓練を大蔵の指導で行う。マスクの位置が仲々難しい。サングラス、目出帽をして、マスクのバンドを頭越しに回し固定するのだが息もれがして相性が合わず苦勞する

午後、アタック用に豊富な食材の中から、6日間の行動食として各自の嗜好にあったアメ、チョコレート、ビスケット等を選択する。上部では食べられないだろうと思いつつ多めになってしまう。

ヨーロッパ隊8人がヤク15頭と到着。
隣のイタリア隊男2人、女1人がC1から帰還。モンスーン明けを待ちかね、各隊に動きが出てきたようだ。

酸素マスクに慣れるために、酸素ボンベにはつながず酸素マスクしたまま就寝する。

【9月18日】ABC泊 頂上見られず
ABCは時々晴れ間もあるが、頂上稜線はガスが掛かったまま。

夜中雪、朝の銀世界を6時前から写真撮影する。頂上が出ないので気長に待つが顔を出さない。朝焼けも期待出来ない。一瞬の雲間にシャッターを押す。

高所順応に裏山を登る。130mUP。南井、山梨、斉藤、荒山、政木と出掛けるが、南井は咳き込みがひどく途中から下山する。

隣のイタリア隊のホンダ製発電機が一昨日より不調のため近藤、斉藤が調整に出掛けるもダメだった。

不自由しているはずだが、彼等は終日陽気だ。

夕食の時、上部の天気良くないのと、それぞれのテント間が長いことで荷上げが相当遅れているが、シェルパ達の疲労が激しいので休養させたい旨の話がある。アタック出発も遅らせたいと隊長・大蔵より申し出がある。

夜食後、南井、荒山、近藤の誕生ケーキが出されると全員思っていたら、次の日に行われたプジャー『安全祈願祭』の前祝いらしい。

就寝中の鼻づまり治らないので大蔵より風邪薬を数日分もらう。



【9月19日】ABC泊 3日間ピーク見られず。

8時20分、サーダーの読経でプジャー（安全祈願祭）が開始される。西側の斜面に石を背丈程積上げた祭壇にウイスキー・スプライト・バター・ビスケット等の供え物が盛り上げられる。その脇に全員のピッケルを置き、香草を炊いた煙をあてて登山の無事を祈る。石を積上げたチョルテンから経典や仏像が描かれた青・白・赤・緑・黄の五色の旗をびっしりつけたタルチョ（旗）のロープが四方に張られ、風になびいて賑わっている。

日本の清めの塩に当たる米が配られ、祭りの最後に掛け声と一緒に投げ上げる。別の器に盛り上げられた粉を互いの頬に塗りあい登頂と安全を祈願する。

隣のイタリア隊5人も参加し和やかに進行する。

今日はシェルパ7人休養日。C1のテントが建てられくらいで十分な荷上げはされてないと思われるが、モンスーン明けを予想して23日出発とサーダーから告げられる。予備日を使い果たしたのでABC-デポキャンプ-C1-C2-C3-頂上-C2-ABCの6日間は無休で連続行動の可能性が出てきた。大丈夫だろうか。

他人に出来ることなら自分もやり遂げるだけだと自分を励ます！！



【9月20日】ABC泊

シェルパ7人が荷上げに出発する、彼等は今日は帰還せずC1に泊り、明日はC2を設営すると聞く。

他の隊は数人のグループで出発して行く。

キッチンボーイ2人も大きい荷物を担いでデポキャンプまで荷上げに出発する。午後、2人が帰還しデポキャンプまで6時間掛かったと話す。我々なら10時間以上掛かるだろうか。

我々8人裏山トレッキングに出掛け6000m地点で引き返す。小雪が舞う天候の合間に登攀ルートの全容を見る。(ABC-デポキャンプはゆるい傾斜のモレーンが延々と続く。氷塔群を渡りリスモの鞍部を目指してC1への登りになる。C2へはそのまま直登となりシシャパンマの西稜端の棚上辺りがテントサイトらしい。C3へはシシャパンマと前山タポカンジャロの間の雪原を東の端まで進み、北東稜に取り付き稜線上の針峰の窪みがテントサイトとなる。頂上への北東稜は両側が切れ落ちたナイフリッジの急斜面だ。陽があたりキラキラ輝く雪上に細いトレースが上にと伸びている。)

6000m地点からモレーンは更に続いており、モレーンが四段になっているのを上から見る。古代の氷河から300m以上の高さが退化していることになる。

今日中に、登頂時のアタックに使用する装備をまとめ通信室に置くよう指示があった。C1までシェルパに背負って行ってもらうために、自分の持参したシュラフ、エアーマット、高所用羽毛ヤッケ、羽毛ズボン下、羽毛のオーバー手袋・予備の手袋・靴下・下着・電池、フィルム・若干の嗜好品をまとめる。

23日出発の発表があったのでアタックの話題に盛り上がる。

南井はABCからプラブーツを履いて行くと言っている。デポキャンプまで、石ころだらけのモレーン上をプラブーツで歩くのは大変難儀ではばかれる。かさばるし、重いが他の人達は自分で背負い、ここまで履いてきたトレッキングシューズでデポキャンプまで歩くことにする。



夕食後、南井69歳の誕生ケーキにローソクが立てられて出てきた。直径30cmをこえ、ケーキ上には『Happy Birthday H・Minamii '04・9・20』と書いてある。コック長が白いカタ（幸運を祈願する長く薄いショール）を南井の首に掛け、皆でハッピーバースデイを合唱し古希を祝う。登頂と幸運を祈ろう。ケーキの1/3を隊員がご馳走になり、1/3をサーダーとコックに、1/3を隣のイタリア隊にお裾分けする。

夕食後食堂テントを出ると辺りが白くなっている。朝までの積雪5cm程になり、テントが雪に覆われた分暖かく寝られた。C1への荷物としてエアーマット入れた分マット薄くなり石が体にあたるが辛抱、辛抱。



【9月21日】ABC泊

あられ混じりの雪と強風が吹きまくり、雲多く陽ざしなく主峰は隠れっぱなし。昨夜の雪で一面銀世界の中、ABCにはチョルテンが6個数えられる。日本・フランス・イタリア2隊・スペイン・ユーゴスラビア隊だ。その他に小人数の隊や個人参加のパーティが居る。一段と白くなった雪景色を背景にチョルテンからタルチョ（旗）が一段高い天空に飾られるのでテン場が大変に華やいで見える。

メールランナーとしてキッチンボーイのクリシュナが、下山時のヤクの手配のためにTBCまで駆け下り、夕方には帰って来た。11時間強で往復したことになる。ビックリギョーテン！！

一番下のフランス隊6人が出発、シェルパ3人も遅れて出発して行く。

副隊長の近藤が東京に衛星電話したところ、エベレスト周辺はこの一週間は晴、但し週の後半は湿気が少し高くなるとの天気予報を得る。

17時近くピークが見られ、頂上周辺の雲が絹雲になってきたので、秋のモンスーン明けは間違いないだろう。だがサーダーの話だと、昨日のC2工作は強風のため出来なかったとのこと。上部の設営が遅れすぎて明後日23日の出発は可能なのか、ダメを出されるのが怖くて誰も話題にしない。

夜食は近藤の誕生日祝いと我々の門出を祝してうな丼が出る。三越特製を大蔵が持参したのだが硬く、タレもなく期待はずれだが、日本の香りとカロリーだけは摂取出来よう。

食後、近藤の49歳を祝うケーキが出される。三日連続でケーキにありつく。どうなってるんだ！！

強風吹き止まないが、三日月に照らされたシシャバンマが姿を見せる。強風と放射冷却とで今夜は寒そうだが明日以降のモンスーン明けに期待してお湯を入れた水筒を湯たんぼ代わりに抱いて就寝。

【9月22日】ABC泊

夜半、テントを揺さぶっていた風はおさまったが主峰は姿を隠している。

サーダーと上部シェルパとの朝の定期交信で、C1のテントが昨夜のドカ雪と強風で破損したり、C2設営が未だ出来てない事を知る。

大蔵と近藤が修理していた衛星電話が接続不能のまま、パソコンでの天気予報接続も諦めた様子のなか大蔵より明日の出発はC1までではなく途中のデボキャンプまでとする最終発表があった。大変な心配を抱いての出発となる。16時強風、雪降り始める。

17時 イギリス人4人とオーストラリア人他の合同隊がヤク30頭ほどの大部隊で到着し、ABCのテン場はオーバーフロー気味。

何日も前からサーダーが23日から5日間は晴れて、登頂は27日と言っていた通りになるのか？

星空と三日月を見る。明日からの6日間は何が何でも登り続けることを誓い就寝。

荷上げの装備一覧 2,160 kg
(悪天候のため割愛される可能性がある)

フィックスロープ	2000m
酸素ボンベ	40本
スノーバーL	40本
S	60本
カラビナ	60個
ガモバック	1個
ガス・カートリッジ	80個
スクリュ	40個
上部テント	12張
ロック・ハーケン	20個
ストーブ(大、小)	12台
食料	隊員、シェルパ分
個人装備	19名分



2 アタック

モンスーン明けが遅れたため、予定より4日遅れての
アタック開始となり予備日を使い果たす。

【9月23日】ABC 9:00 デポキャンプ(5900m) 13:00

サーダーの予想通り快晴になる。長年の感なのか？
神がかりとしかおもえない。

全員でチョルテンに安全祈願し出発。

傾斜のないモレーンのガラ場をひたすら進む途中、C
2へ登るシェルパの一隊がリスモとのコル目指して
登って行くのを見るが、新雪で難儀しているのだから
遅滞として進まない。

途中我々を追い抜いていった第二イタリア隊4人
が我々の今日の宿营地・デポキャンプの大岩の所でい
よいよ本番を前にアイゼン・冬装束に着替えて14時

頃出発していく。

先程のイタリア隊の一人がバテタのか調子が悪いの
か戻ってきて、空いたテントを探して潜り込んだよう
な感じを受けた。

全登山隊の中で日本隊だけがダントツの高齢隊で、あ
との隊は20代~30代前半の若者ばかり。セルビア
隊のミーチョが54歳と言っていたが隊のリーダー
であってABCから上には入らない。私は何人もの若
者に66歳かと尋ねられたし、本当に66歳かと念押
しまでされた。

日本では、高齢にならなければこんな長期の遠征には
出掛けられない。だが高齢でも長期の遠征に出掛け
られるのはやはり幸せなのでしょうね。

今日の工程がC1ダイレクトでなく途中のデポ地
点までとなったので到着時間が早過ぎて窮屈だがこ
れも登頂率の高い大蔵流の心配りなのだろう。

16:30、今日からはコックが居ないのでシェルパ
がお湯を沸かしてくれるだけになる。

日蔭る頃、雑炊の夕食。餅がもどらなく固くて食べら
れなかった。

大蔵から貰った鼻づまりの薬の効果に期待して就寝。

テント3張 荒山・斉藤・政木 南井・山梨・森
安 大蔵・近藤



【9月24日】デポ地 9:30 - C1 (6300m) 15:00
絹雲たなびき快晴。

C1からシェルパ達が迎えに来る。8時、具のない
ラーメン一杯だけ。

ガラ場のデポキャンプでプラブーツを履き100m
ほど先の氷塔の淵でアイゼンを着ける。

ヤボカンチャロ氷河に華麗に林立する氷塔群の下流
の大きなセラック帯と上部の比較的小型のセラック
帯との境目辺りを横断する。

アップダウンが激しく迷路のようでルートファンテ
ィングが難しい氷塔群の中を1時間半程かけ抜けた
所で昨日のイタリア人と出会う。やはり昨夜は何処か

のテントに潜り込んだのだろう。

いよいよC1への登りが始まる。

細いトレースが広い氷壁の斜面を上へ上へと延びている。右上方から出ているデブリの末端部を直登する。青氷の斜面に数箇所横断クレパスが走っているが、先行したシェルパが取り付けしたフィックスロープを目印に自力で飛び越すことが出来た。先に行くシェルパ達が段々豆粒程に小さくなって行く。

6000m辺りに前山ヤボカンチャロ北側斜面端の氷壁がドでかく崩壊した窪みが見える。更に登り続け6300mの巨大なアイスホールの棚上に回り込むとC1に辿り着く。

C1のテントサイト左上に見えるシシャパンマの頂上が早く来いと呼んでいる。

昨日と同様、テント一張に同じメンバーで三人。テントの外には寒さと強風で荷物を置けないので自分の荷物は全部テントマットの下に敷き詰め寝るが狭すぎる。登頂を優先して我慢、我慢。

夕食はお湯を注ぎ足しただけの五目ごはんとテルモスのお湯を注いだ生みそ汁。



【9月25日】C1 9:30 - C2 (6700m) 13:30
快晴

朝食：さんさいおこわ・わかめスープ。お湯が少なすぎたのか、時間が短か過ぎたのか飯に芯がある。

食器持参しなくてもよいとの事前の説明だったので全員がABCからドンブリ・箸・スプーンを拝借してきているが、器はドンブリだけなので飯を食べながら汁を飲むことさえ出来ない。食欲ないので飯を口にいれ噛み砕いたところでテルモスのお湯で流し込むのがやっと、4～5口までしか咽を通らない。

今朝から酸素が配られ1分1Lを吸う。酸素ポンベはチタンの旧ソ連製軽量ポンベで、満タンにすると5kg弱、調整器が1kgで合計6kg程になる。縦長のポンベが片荷にならないように羽绒服、食料、テルモス等で囲み10kg程を背負う。

酸素マスクがどうしても合わず6650mまで無酸

素で歩くが、大蔵より後で無理がくるからと注意される。出発時サングラスを壊し近藤に借りる。予備のサングラスはシェルパが背負う荷物の中に入れてしまっている。

C1には10張ほどのテントがあったので、前後を登るパーティーが昨日より多いようだ。今日はリスモとのコルを目指しひたすら、ひたすら登るだけ。四つ目の氷壁を過ぎ6500mを越した辺りで左の前峰ヤボカンチャロを横に見る感じの位置で急斜面を登り切るとC2のテントが遥か先に見える。

C2のテントサイトは前峰ヤボカンチャロとシシャパンマ北面の間に挟まれた溪谷ウエスタン・クームの入り口に位置しており、これから登る北東稜の稜線を見上げることが出来る。

TBC、ABCの北から眺めた時、中央峰からの稜線が弓形に弧を描き、両側が切れ落ちたナイフリッジの北東稜は、西から見ても急傾斜の上に冰雪と岩峰が頂上まで続く大変険しいルートであることが分かる。

今夜は6人で1テント。

夕食：五目ごはんかつ丼、数口やっと流し込む。今夜から1分間酸素0.5L使用して就寝する。酸素の吸入で、手足の先まで温まると聞かされていた効果より、マスクが大変気がかりで寝辛かった。



【9月26日】C2 9:25 - C3 (7300m) 16:30
晴れ。

C2から上には荷上げがされていないのでシェルパ達は相当の荷物を背負って我々と一緒に出発する。彼等の負担を少なくするため、全員がアタック用の服装や装備を付けて出発する。

酸素毎分1.5Lを吸い、少しだけ登りの平坦な雪面をシシャパンマ西の稜線下から東の北東稜の先端まで、ウエスタン・クームの最奥を目指して延々と歩く。体がやたらと重い。下部では元気いっぱいだった南井が遅れ気味になってきた。有難い！

我々隊員は7060mの取り付け地点で小休止する。シェルパ達は此処で右に折れ、北東稜に取り付く。

ここからは今秋誰も登っておらず日本隊が一番乗りだ。稜線上の針峰を目指して急傾斜の氷雪壁を直登しているシェルパ達のポックとルート工作を見上げていると大変難儀している。(初登頂した中国隊の報告によればこの直登ルートは平均斜度30度、最大42.5度と記されている。)時々小雪で視界がなくなる。シェルパからの交信で荷物が重くて進まないと怒鳴っている。12:30彼等が全然進まないで時間が気掛かりになり、シビレをきらしてシェルパ達を追いかける。シェルパ達のルート工作と競走のように登る急斜面は酸素を吸っていても苦しい。サダーの息子・アンダワが通り過ぎる我々の酸素を1.5Lから1Lに絞っている。明日のアタックの酸素不足が心配なのだろうが、南井のペースが更に落ちる。モラメンチンの尖った頭が見え、数張のテントが見えるとC3に辿りつく。先に着いたシェルパ達が忙しく働いているが日没が迫っているので隊員もテント設営を手伝う。合間をみて振り返ると東にはチョモランマ、チョー・オユー、ローツェ、マカルーの山々。北はTBC、ABCの先に広大なチベット高原が広がる。西はマナスル三山の連山が続いている。南は目指すシシャパンマの頂上付近の氷雪に岩と針峰が突っ立っている。今夜も6人でテント1張。やっと20:00就寝。夜半、漆黒の空を見上げると天の川が流れ、満天に星が散らばり、頂上近くで満月が微笑んで居てくれる。



【9月27日】C3 3:45 - 中央峰頂上 11:20 ~ 11:35 - C3 13:40 ~ 14:40 - C2 18:30 泊

吹いていた強風も起床の1時には収まっていた。1テント6人での出発準備は大変だ。テントの隅の隊員が寝具類を片付けるのを待ちながら、私は着た切り雀の服装にフリースをはおり、オーバースポンを履き、高所用の羽毛ヤッケを着る。つま先が冷え性なので靴下だけは新しい物を履く。大変なおもいをしてプラブーツ(靴)を履き、スッパツを付ける。皆の様子を測りながら、水分たっぷりで塩味のおかゆ

一杯をすすり込む。カラビナ、ユマール、ATC等の確保器を付けたハーネスを腰に廻す。高所帽のうえに愛用の赤色の毛糸の目出帽を重ねてかぶり、酸素マスクを首にぶら下げやっとテントの外に出る。アイゼンを装着し、酸素ボンベにつなぎ、毎分2Lでセットして出発準備をやっと完了する。満月なのに山向こうに廻ってしまい全く明るくないテントサイトを後に、シェルパ7人と日本隊全員が一緒に出発する。ヘッドライトに照らし出される前の人の足跡を辿り、リッジ左をただただ直登する。日本隊がモンsoon明けの今秋初登攀なので膝ほどのラッセルが続くが、シェルパのスピードが速く付いて行くのが楽ではない。



やがて東の空が白んでくる。登っている左側から真っ赤に燃える太陽が黒く波打つ雲海を突き破りモラメンチンの右に出る。東側の大きな山塊の中からエベレスト、チョー・オユーを探すが登りながらでは無理だ。7700mを越す辺りから斜度が更にきつくなり、シェルパ達は腰まで没する新雪のラッセルに苦戦している。



周囲が明るくなると、日本隊がつけたトレースを使い数人が間隔を空けてついて来ている。

斜度60度位か、2ツ目の大きな針峰を右に見る辺りで最強のシェルパ・チュワンニマが大岩を乗り越すのに時間が掛かっている。全く進まなくなる。バテたか？ 我々と一緒にいる2人のシェルパに上方からラッセルに加わるように呼んでいる。

7800mを過ぎ、時間切れかと思える頃、チュワンニマが岩場を乗り越し最後の5m程の青氷の壁と大岩のチムニーに挑んでいる。



私の番で取り付くと、乾いた雪でピッケルを差しても支点にならないし、岩場ではオーバー手をしているので指が掛からない。セットされたフィックスロープを頼りにしたり、ピッケルをバイル代わりにしたり、ピッケルを岩に引っ掛けたりして攀じ登る。アイゼンの爪が良く効き氷と大岩を乗り越すと、先に登ったシェルパ達が笑顔で早く来いと手招きしてくれる。彼等は中央峰手前で狭い頂上に立つ順番待ちをしている。あと20mで8008mに立つことができるのだ。



万歳をした姿をペンバギャルツェンにシャッターを押ししてもらおう。ジージーと音がしてフィルムを巻き戻している。昨夜新しいフィルムに入れ替えておいたのだが、途中写しながら来たので最後の一枚だったようだ。スペアーに持ってきたフィルムは使用済みだった。

日本から持ってきた頂上用のバカチョンカメラを探がせど無い。山梨のカメラを借りペンバギャルツェンに更に2枚撮ってもらい下山準備をする。

C3での出発準備の時から高山病になっていたのだろう。

シェルパから受け取った新しい酸素ボンベに交換し、引き続き酸素2Lで下山する。

大きく遅れて登ってきた南井とすれ違う。

登りは写真を撮りたいので後部を登って来たが下りは3番目で降りる。下山のパートナーのシェルパはペンバギャルツェンだ。ATC使用しての下降と思ったら前をゆく斉藤、森安がフィックスロープに安全確保用のカラビナを掛けただけで下山をしている。5mのチムニーで森安がフィックスロープを頼り過ぎて裏返しに宙ずりになってあえいでいる。パートナーのシェルパが自分の体を森安にすり寄せ降ろしている。

間隔を空けてついてきた数人のスペイン隊と単独でスキーを担いだヨーロッパ系の男とすれ違う。

通行税を支払うべきだよな！！

バラバラにC3に着く。大蔵が依頼された竹トンボを頂上で飛ばし忘れたと言って最初の1ツ目を飛ばす。近藤が上手にカメラに収められず2ツ目を飛ばす。

ソレナリニ飛びました。

すでに10時間行動しているので身体は疲れきっている。テルモスの暖かいお茶の最後の一口を飲み干し、C3の撤収を手伝い、全員がそろったところで予定通りC2へ向け下山する。出来るだけ多く背負い急斜面を自分のペースで下り、ウエスタン・クームの取り付け地点に集合する。行きには無かったテントが5張ほど張られている。

日本隊が登頂したルートへの追っかけに違いない。(自力で登頂出来るのは日本隊だけでした。)

あとはC2までトレースを辿り歩くだけだが踏ん張りがきかず雪道のデコボコに足を取られてふらつき、ふうらつきただただ歩く。遠目にC2が見えていながら仲々着かない。

C2の手前で、夕日の残照が全ての物を赤く染める。今歩いて来たウエスタン・クームの谷間の全体から北東稜、シシャバンマ全部を真っ赤に染め上げる。陽が降り寒い中に隊員全員が立ち尽くし、真っ赤に燃え上がる主峰がピンクに変わり、残照が消えゆくまで余韻を楽しみ、感激に浸っていた光景は一生忘れられない。

皆さん有難う御座いました。やったぞ！！

ヘッドランプをつけ更に歩く。18:30暗くなったC2に倒れこむ。15時間の行動だ。

C3から下るしたのでテントが増え、大蔵と近藤、私と荒山、残りの4人で各1張に分かれる。

夜食はやはり五目めし、4口だけ白湯で流し込む。疲れと栄養不足で寒かろうと思ひ、初めてホカホカを腰と足にはり就寝する。



【9月28日】C2 9:30 - - C1 11:30 氷塔入り口 12:30~13:00 - - 氷塔出口 14:30 - - デポキャンプ 14:50~15:45 - - ABC 19:40 晴

朝食:赤飯4口。パテてきたのだろう、口の両端がはれて来た、胃腸薬を飲む。

昨日の余った酸素を吸い、荷下げも兼ねながら下山する。

登れたし、晴れているし、下りだしスピードが出ていいはずだが疲れが激しいのだろう。登りの時こんなに長く歩いたのかと思ひながら、ABCでのコーラの一気飲みを楽しみに歩き続ける。数箇所あったクレパスも大して広がらず、心配なく通過する。

C1を撤収しながら、フリースを1枚脱いだり氷塔の淵まで来て更に1枚脱ぐ。

迷路のような氷塔の中をかすかに残るアイゼンの跡を探して、往路と同様1時間30分かけ抜ける。

モレーンのガラ場まで着き、アイゼンをはずしデポキャンプに着く。

コックのダウチリとリシュナがわざわざ太巻き寿司とジュースを届けてくれる。高度が下がったせいだろう、美味しく食べることが出来た。

今夜要る物だけを背負い、あとに残した物は明日シェルパが運んでくれるのでデポキャンプに残してゆく。南井1人が往路同様プラブーツを履いてガラ場を歩いているのでベースが落ちる。すっかり暗くなったモレーンの相当奥までサーダーが出迎えに来てくれる。

ティンリでの高所順応で知り合ったセルビアのミーチョが関連の隊員を待ち暗い中で待機していたが途中出会えたともえ追い越しざま私のザックを『背負って行ってやる』と担いでいってくれる。

サーダーの交信でシェルパ7人全員が迎えにきてくれた。キッチンボーイのアンチリが温かいジュースを持って激励に来てくれる。

すっかり暗くなったモレーンをヘッドライトを付けてシェルパ達と一緒に歩きABC19時40分到着。月明かりに照らされたABCに6日ぶりに帰ることが出来た。

我々8人とシェルパ頭のサーダー、ルート工作・荷上げで頑張ってくれた7人のシェルパ、毎食美味しい食事を作ってくれたコックとキッチンボーイの3人の日本隊19人全員が勢ぞろいする。

ザックを降ろす間もなく早速コーラ、ビールで乾杯した後、雑煮が出る、ソバが出るなか、互いに健闘をたたえ合い、お礼を述べ合って全員の登頂を祝福する。食堂テントに移り、大型の登頂祝いのケーキをご馳走になる。

日焼けした隊員の顔が、全員登頂に成功した満足と安堵で一層明るく輝いている。

8000mサミッターの幸せを抱き、自分のテントで一人のびのびと寝る。

トク、保高、皆さん本当に有難う御座いました。

【9月29日】ABC泊 休養日 晴、曇、小雪

成田を出発して29日間で過ぎ振り返ってみると、この6日間のアタックのために総ての事が進行して来たのだ。

日本のアドベンチャーガイズと隊長・大蔵、カトマンズのレーガル・トラベル、中国登山協会、チベット山岳協会との関わりが二十数年かけて作り上げられ、システム化が構築されて来たのです。

身近で見ていると、全てのことが大蔵とサーダーの二十数年来の信頼関係で進められているようだ。大蔵は我々6人全員を登頂させることをサーダーに託し、サーダーはスケジュールから食料、装備、シェルパの手配等々を黙々とやっている。サーダーからの提案を総て大蔵が了解しているようだ。短い打ち合わせで互いに分かり合っている様子だ。

大蔵のパーティが登頂率の良いゆえんだらう。

私は6000m、7000m峰の登頂の経験がなかった他に、60歳の誕生日に前立腺肥大の手術で1ヶ月間入院し、64歳で右鼠径ヘルニア(脱腸)の手術をしており、老化を自覚しての参加でした。

それだけに今回の登頂は40年かけて初恋の山・マッターホルンを登頂した時と同じ位うれしい事です。

今朝、皆、元気そうだがトイレにゆく回数がバカに多いように見受けられる。

潤った気持ちで時をなんとなく過す。

朝食後、『全員登頂と無事下山のお礼』の儀式が石を積上げたチョルテン(祭壇)の前で、サーダーの読経のもと開催される。

昼間は航空便で別送する個人装備(アタックで使用したシュラフ、羽毛ヤッケ、プラブーツ、ユマール、カラビナ、ハーネス等など)の荷造りをする。

夕方、スペイン隊主催のピアー・パーティーに招待を受ける。日本隊へ感謝の意を表わしたいと、日本人とサーダー、シェルパ、キッチンボーイまで日本隊全員で参加するよう要請される。

A B Cの各国山男50人程と二人の山女とでワイン、シャンペン、生ハム、ビスケット等で一時間ほど交流し楽しく過ごすことが出来、素晴らしい思い出となる。

19時30分(日本時間:22時45分)隣のイタリア隊から衛星電話を借りて家内に報告する。昨日アドベンチャーガイズから連絡があって登頂した事を知っており大変喜んでくれた。豊橋を台風通中とのことなど、家内は一方的に話しばなしだ。



【9月30日】A B C泊 休養日 晴、曇、小雪

今日の方が、疲れが出たのか身体がダルイ。テント内で氷点下7度、相変わらず寒い朝となる。入山時に積もった雪の一部がテントの日陰部分に溶けずにそのまま残っている。

撤収の準備が始まりテントサイトの片付け、清掃をし、ゴミは持ち帰るべく回収をしている。自分の荷物を日本まで開かず空輸便で送る別送品とカトマンズのホテルで受け取る物、自身で背負う物の3種類に分け明朝の出発準備をする。終日かけ荷造りをゆっくり楽しむ。

アタック前に描きかけのスケッチを仕上げたく、テン場の一番下に設営しているフランス隊の大きなドーム型テントまで出掛ける。写真撮影しながらのスケッチは大変だったが5枚目を仕上げられた。写真撮影、スケッチ、読書も高所順応に有効とのこと。



夕方、明日の下山用のヤク30頭ほどが到着する。同行して来たチベタンが我々の炊事用テントでお茶やビスケットの接待をコックから受けている。陽が蔭っているのに極端に薄着だ。数人のチベタンが懐から原色の数珠や小物を買えとテントを廻るが誰も手を出さない。

【10月1日】A B C7:50 - - T B C13:10 泊
晴後曇

出発に先立ちミーチョに別れを告げに行き、彼等と記念写真を一緒に撮る。

A B Cを出発する時、シシャパンマは朝日に輝き一点の曇もなく凜々しい姿で我々に別れを告げてくれる。

出発準備しているヤクやシェルパ達より先に出発する。

全員が嬉しい気持ちそのままに、とてつもなく速く歩き通す。7時間位の見通しを5時間20分でT B Cに到着し、シェルパやヤクを3時間余り待つことになる。

T B Cにはチベット登山協会の駐屯員用の大テントと売店の大テントの2張があるのみだった。

売店テントの真ん中にはヤクの乾燥糞を燃料にしたストーブが焚かれ、外で冷えた身体を温めてくれる。売店でスプライト4本を買い、廻し飲みする。此処まで歩きが終わった安堵と高度が下がったことで実に美味しい。1本10ルピー×4本=40ルピー。ルピーを持って無いので100円で支払うと、売店中の札をかき集め色々の金種で沢山の札を釣銭として渡してくれる。ガイド役で同行しているラクパテンジン(21歳)が数え直して渡してくれたので間違いはないだろう。

ヤクを待ちかねていると、チベット登山協会の役人がウエルカムドリンクを差し上げ度いとテントに招き入れていてくれ、全員にラサ産のリンゴを一個づつくれる。

仲間が到着しないので売店に戻ると、食欲が戻りインスタントラーメンを注文。激カラ今麦郎ラーメン4個×8元=32元、肉入りラーメン1個5元、バター茶飲みほうだい8人分10元、合計47元を先程受け取った沢山の釣銭で支払う。

辛いものに強い山梨と斉藤、森安が武者ぶりついている。ひび割れた唇にしみるのを我慢して南井も食べている。私は辛さに弱いので肉入りラーメンを食べる。売店の奥さんは1mほどの筒にバターとお茶の葉とお湯を入れ、棒で突くように掻き混ぜて作るバター茶を何杯でもおかわりする我々に出し続けてくれた。

15:00過ぎてシェルパとヤクがやっと到着する。入山時にサーダーが自然環境保護のためチベット登山協会駐在員に預けた全額のうち、ゴミを持ち帰った分500ドル、2000mのロープや装備類をT B Cまで持ち帰ったことを確認して2000ドルを返還

してもらおう。

明朝まで1泊なのでテント1張に2人が入る。

今夜で24日間のテント生活が最後になるはずだ。



【10月2日】TBC 8:00ーートンラ峠(5230m)
10:30ー修行洞 11:30~12:00ーニヤラム(昼食)
12:20~13:45 - - ザンムー(2530m) 13:20
泊

TBCには我々日本隊しか下山してきてない。朝早くからシェルパ達が出発準備をしている。チベット登山協会の名前入りの中型バスとトラックにて出発する。

広大なチベット高原を木の葉のように揺れる車中で満ち足りた気持ちで身をゆだねる。遠く山すその部落や放牧のヤギの群れが懐かしく望まれる。

サーダー、シェルパ、コックの主だった連中が一緒にのバスに乗る。

今回はシェルパ7人全員が登頂出来たので若いシェルパが特に喜んでいる。

それと今春、チョモランマを登頂直後8500m辺りで、広島女医・大田祥子(63歳)さんが突然死するアクシデントに大蔵はじめ今回の主だったシェルパが関わっておった。その直後の秋の山行で日本隊全員を登頂させられたので安堵出来たのだろう、笑い声が絶えず賑やか。

期待していたトンラ峠からのシシャパンマ最後の遠望は雲に隠れ姿を見ることが出来なかった。

トンラ峠を越すと山々に緑が増えてきた。

信心深いサーダーが修行洞に寄る。50年程前日本でも見られた米の収穫を一家総出でしている街道筋を少し下ると小さな寺院がある。寺男を探しやと寺院に入ると、高僧が修行したとされる大石を支えた部屋があり、数人のシェルパが熱心にお経を唱えている。

バスで少し下ると急に山の斜面にビルが建ち並びニヤラムに出る。山梨が昨年秋チョーユーに登った帰途に通過した時とは比較にならない程の発展ぶり

のこと。

街道筋二階の中華飯店で野菜たっぷりで肉類も旨い昼食を久しぶりにたっぷり食べる。

大蔵隊長曰く『10年前のチベットでは食べられる物がなく貧しかったが、今では食材も多く日本の料理人顔負けの美味しさになった。』と

バスは深い谷沿いに下るとすっかり緑が多くなり、白糸の滝が幾く筋も雲の中から生じ落ちる様は水墨画の光景である。対岸ばかりでなくバスが落水の直撃ですっかり砂埃を落とすことが数回あった。

バスは相変わらずゆれに揺れて下ると 国境の町ザンムーに着く。10月1日中国建国記念日の横断幕を町のあちこちで見える。ホテルのフロントで大蔵が中国の添乗員と長いこと1人1部屋だと交渉しているが部屋が無いことを理由に2人1部屋になる。森安と同室。シャワーの順番が待ち遠しい。裸になり勝手が分からず狭い部屋でコックを探していると、突然、のぞき窓から手が伸びて来て小さなコックをひねってくれる。水量少なく、ぬるま湯だが髪も体もサッパリする。

夕食後、暗くなった街を皆でぶらつく。アメでピーナツを固めた菓子のつもりで1袋買う、2元。角の果物屋でリンゴ8個、1.3kg、13元。

やっと人里なり！！

シャワーもベットも手袋なしの就寝も24日ぶりだ。しっとりとした空気と鼻ずまりがないので呼吸が大変らくになった。

掛け布団大分重いが手足暖かく寝られて幸せ、幸せ！



【10月3日】ザンムー7:45 - - 税関8:20ー国境
9:00 - - コダリ 10:00 - - カリンチョク(1120m)
昼食 12:20~13:10 - - カトマンズ(シンギホテル)
15:40

ザンムーは国境を挟んで中国側の街。山深い谷間の中に氷河を抱いた峻峰が突っ立ち、その急斜面にホテルや色とりどりの家々がへばり着くように建てられている。

昨日と同じくシェルパ達と一緒にのバスで少し走る

と立派な建物の税関に着く。国境を挟んでの交易が盛んなのだろう人で埋まっている。登山、トレッキング、旅行者のほかにチベット、ネパール人も沢山いる。現地人と思われる人達はフリーパスで気軽に中国の軍服を着た役人の前を通り抜けてゆく。役人達は何もしていないようだが、バスから降りて手荷物を持ったまま2～30分待たされる。荷物検査の機械が設置されているが作動させてない様子、パスポートを見せただけでアッサリパスする。

建物の外で待っている中国政府指定の窓ガラスが2ヶ所閉まらない車に分乗する。国境のためわざと整備してなのかと思える程ひど過ぎる石ころだらけのガタガタ道を下り、国境手前の橋の袂まで送ってもらう。

コダリに掛かる橋の真ん中に描かれた太く赤い線が中国：ネパールの国境だ。チベット側の建物は立派だがネパール側には税関と思われる小さな建物しかない。役人らしき人が居るがフリーでネパールの入口の村コダリ（ネパール側の町）に入国してしまった。建物、服装、風貌などからチベットとネパールの貧富の差がはっきりしている。

ネパールのバスに乗り換え更にひどくなった石ころだらけの道を下る。

昨日の朝から1日半で高度がさがり、厳寒から夏の気温になり身体が悲鳴を上げている。

川のほとりのカリンチョコの食堂で昼食。現地の人と同じアルミの皿に盛り付けたカレーライスを食べる。川魚の焼いた丸干しが添えられ美味しい。



道もなだらかになり山も低く丸みをおびて来てカトマンズの郊外に着く。出発の時、戒厳令下で人を見ず不気味なほど静かったが中心地に近づくに従い車が渋滞し、人ごみで賑わう本来の姿に戻っている。ROYAL SHINGI HOTELに1ヶ月ぶりに戻る。薄茶色のぬるま湯だが体がふやける程長く風呂につき2度も3度も洗い流す。

【10月4日】カトマンズ泊

TBCから2日でカトマンズに下山した。行きにはカトマンズからラサに飛び、更にトヨタのランドクルーザーで幾つもの峠を越えてTBCまで1000km余を遠回りして、6日間かけTBC入りしたのは、高所順応をしながらのことでした。



昼は我々全員、サーダーの自宅に招待され、シェルパ全員と共々ご馳走になる。

自宅は5階建ての立派なビルで全員驚かされる。シェルパは年2回、春、秋の遠征で生活しているが、年2回の遠征に採用されれば高給の大学教授、高級官僚より稼ぎがあるようだ。後で分かったことだが、裏に、もうひとつ一段と立派なビル建設中の現場を見て度肝を抜かれました。

同行したアンダワはサーダーの次男で壁にエベレストへ3回登頂した写真が飾られている。人柄もよく次期サーダー候補者のようだが、長男は高所で遭難死しておるので、父・サーダーは次男・アンダワを高所シェルパではなくトレッキング・シェルパにさせ度いのだと大蔵から聞く。

夕食はチベット料理店でシシャパンマ登頂祝賀会になった。

日本隊19名全員とサーダー婦人、レーガルトラベル社長と幹部、運転手などが一堂に会し、乾杯、乾杯を繰り返し、彼等の大活躍に敬意と感謝を表す。レーガル・トラベルの社長はネパール人だが流暢な日本語と冗談まで交えて座を和ませながら司会を進行してゆく。日大卒と聞き納得する。

此処に出席するに当たり¥25,000円会費を支払う。

アドベンチャーガイズの予算に我々の2万円がシェルパ達へのボーナス、5千円が会食分に加算されると説明を受ける。

陰で論議を呼んだが、悪条件下で登頂出来たのだから仕方ないだろうと落ち着く。

我々6名はやっぱり純潔の日本人ですね。

【10月5日】カトマンズ泊 休養日

夏のスタイルに着替えたので、沢山の衣類が余ってきた。明日の出発の準備にかかり、背負って帰る物と日本に帰ってから一ヶ月程しないと受け取れない別送品とに分ける。

成田空港を出発してから伸ばしっ放しだった髭を手入れして日本に帰ろうとシンギ・ホテルを出る。この春カトマンズに来た時知った王宮近くのアンナプルナ・ホテルの理髪店に寄る。エイズの心配もありカトマンズでは一流の店を選ぶ。日本に帰れば剃り落とすことになるので数日間楽しむだけだが、満足して630ルピー（約1,000円）支払う。

昼食は個人負担なので一番の繁華街のタメル街にある日本料理店『ふる里』に4人で出向く。さばの味噌煮定食：30ルピー（480円）。懐かしい味に郷愁をそそられる。

夕食も『ふる里』に出掛ける。昼に居なかった2人を誘い6人全員で最後の夜を過ごす。今日までの36日間で山男同士の絆がしっかりと結ばれ、一生の付き合いになるだろう。

6人でたっぷり飲み食いして10ドルで釣銭がもらえた。

いくらなんでも計算間違いではないのかな？

ホテルのテレビで豊橋が集中豪雨にあい2000人に避難命令が出されことをNHKで知る。心配！！

【10月6日】カトマンズ13:00 バンコク17:50

スーツ姿のサーダーとオートバイで見送りに来てくれたアンダワと握手を交わしシンギ・ホテルを後に空港に向かう。

人と車でごった返している街中を通り抜け、入口で兵隊の検問を受け空港に着く。

手続きの時、私だけ名古屋へ向かうのをカウンターの係りに言い忘れ、手荷物が成田行きと一緒にってしまう。

今までだと、搭乗するとき飛行機の間近かで全員の荷物が広げられおり、再度確認出来たのだが今回は積み込まれてしまっていた。

大蔵に成田から宅急便にて着払いで送ってもらうよう依頼する。

木製長椅子の待合室では皆無口で過す。

バンコク空港の乗り換えで私は7時間程過さなければならぬが勝手知った空港なので不安はない。

23時過ぎ、成田に向かう7人を25番ゲートに見送り、来年2月、副隊長・近藤が経営する米沢・天元台のロッジで再会を誓う。

【10月7日】バンコク0:50 名古屋8:30

家内がフクロウの置物を集めているので、今までと違う水牛の角のつがいのフクロウを土産に10ドルで買う。

ターミナルの一番端の一番ゲートからバスに乗り搭乗する。

朝の名古屋空港に家内、娘夫婦が向かえてくれる。

お陰さまで、66歳の青春を成し遂げることが出来ました。

応援して下さいました皆様大変有難う御座いました。

感謝申し上げます。

3 参加者

隊長：大蔵喜福	1951年2月8日生	53歳
サブ：近藤 明	1955年9月21日生	49歳
隊員：南井英弘	1935年9月20日生	69歳
荒山孝郎	1935年10月4日生	68歳
政木通弘	1938年2月4日生	66歳
山梨 征巳	1941年7月28日生	63歳
斉藤祐一	1947年1月28日生	58歳
森安東光	1959年4月5日生	45歳

Sardar:	AngPhurpa Sherpa	1947年生
Exp. Sherpa:	Chhewang Nima	1967年生
	Ngima Nuru	1981年生
	Pasang Kidar	1979年生
	Dawa Chiri	1966年生
	Pemba Geljen	1969年生
	Lhakpa Tshering	1983年生
	Pemba Geljen	1972年生
Cook :	Dawa Tshery Sherpa	1975年生
	Krishna Bahadur Tamang	1970年生
Kitchen Boy:	Ang Chhiri Sherpa	1978年生

Chhewang Nimaは多くの8000m峰に登っており、エベレストだけでも11回登頂しているクライミング・シェルパである。

今回、頂上直下の急雪面でのラッセル、氷壁と岩壁の登攀を目の当たりにして最強のシェルパの称号に値すると納得した。

八千メートル峰高齡実登頂者リスト

[2004年12月31日現在・山森欣一調べ]

(注) 氏名の前の×は故人、fは女性。 *印欄は八千メートル峰登頂回数

順位	氏名	生年月日	山名	登頂年月日	年	日	*
001	f内田敏子	1931.4.12	チョー・オユー	2002.10.1	71	172	
002	三浦雄一郎	1932.10.12	サガルマータ	2003.5.22	70	222	II
70歳代(2名・内女性1名)							
003	加藤幸彦	1933.1.30	チョー・オユー	2002.5.10	69	100	
004	南井英弘	1935.9.20	シシャパンマC	2004.9.27	69	7	
005	荒山孝郎	1935.10.4	シシャパンマC	2004.9.27	68	359	II
006	f折原幸子	1936.8.5	チョー・オユー	2003.9.28	67	54	
007	鈴木昭	1937.12.1	チョー・オユー	2003.9.28	66	301	
→008	政木通弘	1938.2.4	シシャパンマC	2004.9.27	66	238	
009	石川富康	1936.11.22	チョモランマ	2002.5.17	65	176	VII
010	平田恒雄	1935.2.2	チョー・オユー	2000.5.12	65	100	
011	澤田治之	1939.12.18	チョー・オユー	2004.9.27	64	284	
012	渡邊玉枝	1938.11.21	ローツェ	2004.5.15	64	176	V
013	f白岩靖子	1938.6.3	チョー・オユー	2002.10.1	64	120	
014	青木正次	1936.5.16	チョー・オユー	2000.5.12	63	362	
015	山本俊雄	1936.7.13	チョモランマ	2000.5.19	63	311	II
016	f国枝宏子	1940.1.30	チョー・オユー	2003.9.21	63	234	
017	鈴木克茂	1940.3.4	チョー・オユー	2003.9.27	63	207	
018	f×大田祥子	1941.3.1	チョモランマ	2004.5.20	63	80	II
019	山梨証巳	1941.7.31	シシャパンマC	2004.9.27	63	58	
020	大沢功	1941.10.20	チョー・オユー	2004.9.27	62	343	
021	平林丈彦	1942.1.7	チョー・オユー	2004.9.27	62	264	
022	奥克彦	1937.1.16	シシャパンマC	1999.9.16	62	242	
023	近藤和美	1941.11.22	ガッシャーブルムII	2003.8.1	61	252	VII
024	村田博	1941.1.18	チョー・オユー	2002.5.10	61	112	
025	小川武	1942.7.30	チョー・オユー	2003.9.28	61	60	
026	今野一也	1939.4.6	チョモランマ	2000.5.19	61	43	
027	f×坪山淑子	1942.12.5	チョー・オユー	2003.9.28	60	297	
028	三渡忠臣	1939.8.9	チョー・オユー	2000.5.14	60	279	
029	斎藤惇生	1929.9.9	シシャパンマC	1990.5.21	60	254	
030	×原田達也	1935.4.6	シシャパンマC	1995.9.26	60	173	
60歳代(28名・内女性5名)							
031	大内一成	1941.8.3	ガッシャーブルムII	2001.7.10	59	341	
032	桑原巖	1935.11.3	ダウラギリI	1995.10.6	59	337	II
033	谷口正彦	1939.1.25	チョー・オユー	1998.9.26	59	244	
034	中島道郎	1930.9.21	シシャパンマC	1990.5.21	59	242	
035	石井伸一	1944.3.24	チョー・オユー	1944.3.24	59	188	

② シンヤパンマ登山における隊員の血中酸素飽和度・脈拍数データ

上段：酸素飽和度 下段：脈拍

月日 標高 (m)	9/21		9/22		9/23		9/24		9/25		9/26		9/27		9/28	9/29
	早朝	夕方	早朝	夕方	早朝	夕方	早朝	夕方	夕方	夕方	早朝	夕方	早朝	夕方	6800 ~5700	5700
斎藤裕一	83	81	83	85	85	80	84	71	69	70	73	63	—	—	—	83
	90	90	78	88	74	98	96	93	57	99	86	107	—	—	—	83
山梨証己	80	82	83	83	83	78	83	76	79	75	75	66	—	—	—	83
	85	88	95	88	100	98	96	98	90	97	82	95	—	—	—	86
政木通弘	80	80	81	83	78	78	82	80	79	80	96	68	—	—	—	80
	88	80	87	81	84	81	80	92	86	75	117	93	—	—	—	—注6
荒山孝郎	83	81	84	82	87	75	80	76	82	78	75	59	—	—	—	83
	78	86	82	93	84	103	76	95	95	103	90	102	—	—	—	87
森安東光	82	82	81	82	82	82	80	80	75	76	71	66	—	—	—	77
	88	74	76	68	87	78	90	88	95	100	78	95	—	—	—	82
南井英弘	83	82	86	85	80	78	78	76	72	71	74	75	—	—	—	79
	101	78	84	75	100	97	94	118	100	93	94	108	—	—	—	97
近藤 明	81	81	83	82	84	80	82	78	78	79	77	69	—	—	—	86
	76	76	78	81	84	91	91	96	94	94	80	98	—	—	—	76
大蔵喜福	81	81	84	83	84	85	85	81	80	80	75	71	—	—	—	85
	82	90	85	94	82	80	79	92	90	94	85	105	—	—	—	82

注6:数値 22? ※9/25~27 までは睡眠及び行動に酸素吸引あり。24,25 日は未計測あり、28 日は計測せず。